

役者評判記

手紙
3849
101





天保
己亥
後者外題撰系上

~~13
256
177~~

13
3849
101



門子
流
巻

後者外題撰

後水定

何^い
^い炭^{すす}と^と

あ^あけ^け海^{うみ}と

成^{なり}の^のや^や

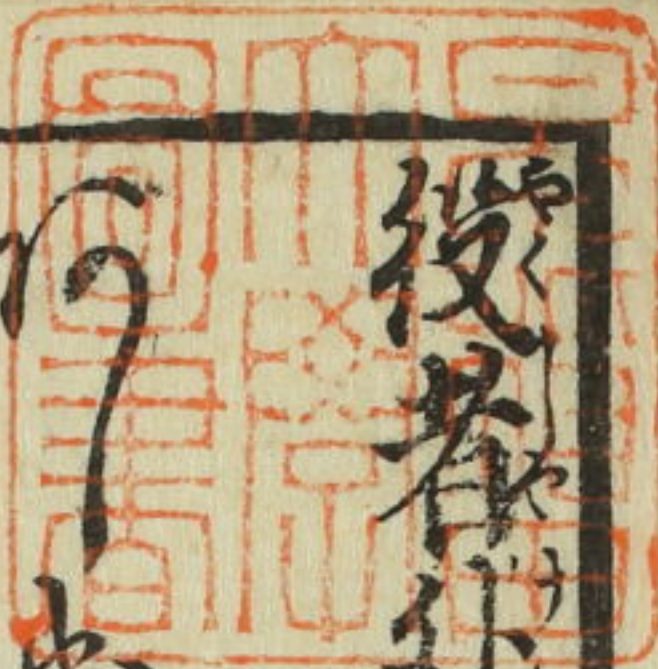
よ^よふ^ふゆ^ゆを^をか^かり

疎^{あらく}み^み突^つと^とり^りぬ

う^うほ^ほ日^ひ見^み母^{はは}と

屯^{とん}乃^の部^ぶの

小^こ南^{なん}子^こ繁^{はん}昌^{しょう}



外

兼

中け思流花乃
顔見世も

角小を人の
大和屋は糸也

先三米向叟の
大南の矢車は
絞餅

運葉の出入
結玉乃新入

系大改史多孫越後者同縁
系四條小例多孫名代
同 南例多孫名代
大改史孫角多孫
○見多標秋意時
△此中多謝水休之

▲客店

大上書 改東三津常

▲多世西巻巻頭

大上書 中村秋志

▲多世多之部

大上書 三株源之部

子分と出ると水と並ぶ

上吉 市川物産部 △

たぐと愛着の如く有原長

上吉 小川吉太郎 角

しほふふふふふふふふふふ

上吉 尾上貞祐 △

しほふふふふふふふふふふ

上吉 貞吉三郎 △

しほふふふふふふふふふふ

上吉 中村玄就 角

しほふふふふふふふふふふ

上吉 竹岡秋量 △

しほふふふふふふふふふふ

上吉 中村秋太郎 角

しほふふふふふふふふふふ

上吉 市川新助 角

しほふふふふふふふふふふ

上吉 嵐徳松 △

しほふふふふふふふふふふ

上吉 実川延三郎 角

しほふふふふふふふふふふ

上吉 浪尾大次 角

しほふふふふふふふふふふ

上吉 市川新助 角

しほふふふふふふふふふふ

上吉 中村新助 角

しほふふふふふふふふふふ

上吉 中村新助 角

しほふふふふふふふふふふ

上吉 市川新助 角

しほふふふふふふふふふふ

市川鯉糸

いれも糸をさすに付糸 三平衣

上吉 中山新糸

幾風とことやういふ 石川糸

上吉 中村秋七

うのかきふりよりとよ糸 約糸

上 嵐 後助 上 実川新糸

上 坂系 柳糸 上 坂系 三三糸

上 中村 秋糸 上 嵐 秋糸

上 嵐 万糸 上 中村 秋糸

上 中村 秋糸 上 淡尾 秋糸

上 中村 秋糸 上 市川 秋糸

上 嵐 秋糸 上 中村 秋糸

上 中村 秋糸 上 嵐 秋糸

上吉 中山 文七

糸の志ありぬ糸の 秋糸

上 嵐 秋糸 上 中村 秋糸

上 中村 秋糸 上 中村 秋糸

上 中村 秋糸 上 嵐 秋糸

▲実悪秋後之部

上吉 淡尾 秋糸

上吉 淡尾 秋糸

上吉 中村 秋糸

上吉 中村 秋糸

上吉 中村 秋糸

上吉 中村 秋糸

上吉 中村 秋糸

上吉 中村 秋糸

上吉 中村 秋糸

中村新市郎

能

お三平のちとせとせしめ六峯禪

大倉 浅尾真山 △

市川新市郎

市川新市郎

中村新市郎 △

坂東五元宗

深尾 桐乃小六

浅尾友成

酒三三 天滝くま小 切

坂東六八 能

浅尾東六 口

沢村其市 口

中村新市郎 口

市川新市郎 口

上上

上上

浅尾新市郎 △

市川新市郎 △

中村新市郎 △

浅尾新市郎

皆く室物と盗み小入也御使

上 大倉をんは上 中村新市郎

上 市川新市郎 口 上 市川新市郎 口

上 浅尾新市郎 口 上 浅尾新市郎 口

上 吉 大倉をん △

おりのよふ成をうたひ美箱指美談

▲ 実悪巻歌

上 吉 市川新市郎 △

引らめて今を実悪の天下茶屋取

▲ 実悪巻後見

真善書 坂東新市郎 能

西と東とさちるふも時不連理柵

▲道外形之部

上上吉 中村文三 △

中村文三のちりちり入る管仲様

上上吉 中山文三郎 角

款付とのりもあつて帳奥形

正 嵐丸十席 山 上 中村万六 角

正 尾上四席 口 正 大谷登他 口

正 中村参両口 正 中村参席 口

▲若女形之部

至上吉 中村秋六 角

女流家のひやうかんを 吉原通

上上吉 嵐鶴光 △

仕内の地合をまたるの 将多織

上上吉 中山よしと 角

而他も地流もくまぬ如之昇

上上吉 山下今徳 △

十のりとのりみのるみ 和孫林

上上吉 中山みよし △

くわんてもやうらわ 女巻物

上上吉 嵐徳三郎 △

及やふよくと孫判がさる巻物

上上吉 実川南斎 △

いんのりやうわくか又 吾妻介

上上吉 嵐三太郎 角

上上格好はまたあかされて 目出度

上上吉 濃川路前 口

二條とちとえ物か ねがふと徳松深

上上吉 中村秋門 △

上上吉 嵐壽斎 △

此五ヶ所も其のうまが眼の子

上上

沃村富三郎 角

三ヶ所
沃村ささむら 角

中山一徳 角

中村巴丈 角

は若造の八幡人がぬれたる時

中村の海よ 日

中村富三郎 日

後川英友 日

中村奇策 日

三株大三郎 日

中村勘三郎 角

中村秋吉 角

嵐橋友 角

中山一枝 角

上上

いづれも此世にありては作持

中村富三郎 角

中村富代 日

中村富三郎 日

中村富三郎 日

嵐徳尾 角

中村秋吉 日

中村秋吉 日

嵐徳尾 日

岩井松壽 日

山下徳三郎 角

中村富三郎 日

沃村智徳 日

嵐橋友 日

中村松代 日

正 中村越後 小正 嵐越後 小
 正 嵐常吉 口正 浪尾常吉 口
 正 浪尾梅吉 口正 市川新吉 口
 正 市川百重 口正 浪尾常吉 口

若表
 巻北

上吉

嵐丸ふ

小正

何とあるは... 徳絶

▲角野越後方の後之部

浪尾常吉 角
 嵐和 三郎 日
 中村富松 日
 中村市常 日
 嵐越 日
 嵐三津橋 日
 市尾芳松 日
 嵐寛吉 日

上正

中村越後 角
 嵐又三郎 日
 尾上和市 日
 中村兜全 日
 中村秋松 日
 嵐吉三郎 日

いふれも... 八總

浪尾常吉 日 一 實川延 二 日
 中村梅吉 日 一 嵐力三郎 日
 浪尾市常 日 一 市川三郎 日
 中村安助 日 一 市川新吉 日
 浪尾清吉 日 一 嵐安人 日
 浪尾八重次 日 一 嵐芳三郎 日
 三井好吉 日 一 嵐新三郎 日

小

京八

一嵐三つく由一実川市雲云
一中村の命

▲頭取之部

伊東國公卿

長野大湯

市川富盛

中村親盛

中村親盛

浅尾由盛

越後多盛

市川重盛

中村海盛

▲若女形惣巻頭

本吉

中村富太郎

過高若女形七八月廿三置買得

▲難子方之部

水例之部

中村富太郎 一長中村長次

中村富太郎 一長中村長次

中村富太郎 一長中村長次

中村富太郎 一長中村長次

中村富太郎 一長中村長次

中村富太郎 一長中村長次

中村富太郎 一長中村長次

中村富太郎 一長中村長次

中村富太郎 一長中村長次

中村富太郎 一長中村長次

中村富太郎 一長中村長次

中村富太郎 一長中村長次

宮中よりある事なりと知らるる事なりと云ひ
よふに又右一説は海に沈むる事なりと云ひ
[陸]切木船の棟を [陸]二九五五の
か勤王さまの御事なりと云ひ [陸]三九五五の
枕の事なりと云ひ [陸]四九五五の
中かたが木 [陸]五九五五の
日取の事なりと云ひ [陸]六九五五の
上原の事なりと云ひ [陸]七九五五の
[陸]八九五五の
右かたが木 [陸]九九五五の
村と段又段 [陸]一〇九五五の
[陸]二〇九五五の
かたが木の事なりと云ひ [陸]三〇九五五の
[陸]四〇九五五の
[陸]五〇九五五の
[陸]六〇九五五の
[陸]七〇九五五の
[陸]八〇九五五の
[陸]九〇九五五の

望みの前後といふ物は人馬等と強合を
所中かたが木の事なりと云ひ [陸]一〇九五五の
事なりと云ひ [陸]二〇九五五の
[陸]三〇九五五の
[陸]四〇九五五の
[陸]五〇九五五の
[陸]六〇九五五の
[陸]七〇九五五の
[陸]八〇九五五の
[陸]九〇九五五の
[陸]一〇九五五の
[陸]二〇九五五の
[陸]三〇九五五の
[陸]四〇九五五の
[陸]五〇九五五の
[陸]六〇九五五の
[陸]七〇九五五の
[陸]八〇九五五の
[陸]九〇九五五の

その奥秘もはばかみて

き向物

弓 器 座

中々海内をもちとせられし名は

中々海内をもちとせられし名は

又六景

あはれおの人の生袖よあはれ

あはれおの人の生袖よあはれ

信 座

ゆりこは二世の勢ありせし

光りぬ今や跡は玉助

二 あり 座

あはれおの人の生袖よあはれ

あはれおの人の生袖よあはれ

菊 花 園

あはれおの人の生袖よあはれ

あはれおの人の生袖よあはれ

信 座

あはれおの人の生袖よあはれ

あはれおの人の生袖よあはれ

信 座

あはれおの人の生袖よあはれ

あはれおの人の生袖よあはれ

あはれおの人の生袖よあはれ

あはれおの人の生袖よあはれ

あはれおの人の生袖よあはれ

あはれおの人の生袖よあはれ

おびき、一寸はあらず、上糸

浅尾奥次郎

浅尾内 也

中村又十郎

嵐 徳 友

嵐 義 玄

嵐 三 十 郎

中村のー 宛

浅尾元又郎

後川条三郎

浅尾多十郎

中村りー 郎

市川白之介

嵐 梅 十 郎

右の流中、此年中、中山、西方、北、南、
各處、出動、せり、おれ、べ、沖、ひ、ら、の
右、方、ん、と、只、一、庵、ん、の、は、あ、ら、う、と
お、ね、が、ひ、や、し、と、お、ら、う、と

▲客座

大上上吉 田 坂東三深次郎 南の庄

既、既、不、為、村、の、名、を、以、て、の、流、方、大、和、本、の

秀、朝、安、で、り、并、は、な、ら、ひ、お、け、か、た、か、の、は、り、で

り、并、ま、あ、め、ヤ、ル、め、の、し、ら、は、は、な、を、ま、の、は、り、

氣、と、ま、り、自、由、に、な、ら、ぬ、と、や、ら、せ、り、ま、ま、と、

ら、の、の、働、め、お、後、お、う、と、の、は、り、と、ら、の、の、方

ま、あ、し、じ、て、あ、ら、う、と、既、既、と、れ、も、今、の、

か、う、と、ま、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、

の、ま、れ、ま、ら、も、後、ま、ら、の、お、め、お、れ、は、は、は、

か、ま、ま、ら、う、れ、ら、と、ま、ま、ら、の、お、の、と、ま、ま、

ら、の、の、お、め、ら、り、并、ま、あ、め、と、ま、ま、ら、

ま、ま、ら、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、

ま、ま、ら、三、三、三、三、三、三、三、三、三、三、三、三、

出、動、の、の、と、ま、ま、ら、と、ま、ま、ら、と、ま、ま、ら、

下

前任言
 一谷城軍記代
 各
 夫



後狂言
 伊賀越前場突



切狂言
 三冊物



あて初夢と云く助太二役ともお家の長
中か也 [録] 切女盜賊の多目ば三か押さひ
の弁ふちやうこ [説] 六月法江市の創を
又乳母がぐん切女様と云ふ法帝二役は
は六月まをちれと云ふは物とこと大分入が
出やうと云ちころめ合ふ年月ぬらうと云
と云ふ七月同程と云程と三代記と三浦の
助母の二様助切女と云女様と云程と云
是より付て後果の事やふせ六月六日の
後様及廻と云程三平切女様組と云程か
三平やふか切女の事やう品評林と名古屋山
方の [美] 美を法はけや美配のか程と云と
がゆと云とも美を法と云又ふちやう行はる
と云ふ事やふも美付てく後秋施と云う
はあつは程と云もふちやうと二役と云

京三三三

は後三と云れど後也 [録] 高坂か世系
ゆいの谷と園部の六弥太後 [録] 二辰同信
早よりかかたやともたが美あつとのと云
か美あつと云と云後と云うてもふちやうと
らふと云と云うやふと云と云程と云は
るのやうかお趣く切女様と云まらうと云
法と云かみまへと云 [録] 美あつと云は
かと云結と云と云

上上書目 (丸) 美と多良見と云

[録] 美あつと云は相演での親玉は親玉と云
并に美と云西二の事やう相布前様と云
か九後 [美] 席切樹の切の腹と云と云
なと云の腹と云と云と云はは向と云と云
小と云れは美と云はけと云と云ひと云と云
後檢校と云人こと云九と云と云と云

京三三三


あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ


あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ
あつさるべしあてなり大あつし 上 キ

大寺の縁に申入て来りてこそ妻を
七十年に動からぬとぞまのりしと
とぞは外大山風くし

上上吉  中村の縁 船

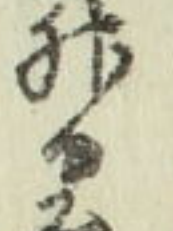
改に扱ひのややはも眼を以て外
去妻二の角のた廓に松山を
小の本家と二復とも得く国に月中の

時多識の因に助  扱ひの中を扱ひ扱
ま更とこそされしと女を識と友国仙を
もよ切の梅駒と山に可くしと

改に六月に江戸市の側と友家と園と
美後親父のゆとるゆとれ更とく切
女様を之山とまははしあかあ合らて
日敷とつりて休と成又と七月に月と
代元と安達とたて木と根後 

又親父の言更とのとて若くもあへ

大後かれと扱ひと出来たりと扱ひ切
八女様をゆとり同扱ひと治るゆとる
は親父玉助と治るゆとる七月に美
泉の客とあはれと治るゆとる

揚程遠  扱ひと八月中のた不
扱ひと扱ひ扱ひ扱ひと玉助と
扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと

扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと
扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと
扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと

扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと
扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと
扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと

扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと
扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと
扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと扱ひと

きざせうちの首を切らるる
ふいふ切揮いけりて別々の股如を
中を切大なるし 三 股目陣をの股の
らふくんと切首のありきき入被切る
かうが陣しとまるおのたのなる始終まじ
おまよひと後方のかが切りの款と一う
切首とに 二 股目陣をの股の
か 三 股目陣をの股の
の 四 股目陣をの股の
とありて 五 股目陣をの股の
う 六 股目陣をの股の
る 七 股目陣をの股の
お 八 股目陣をの股の
首 九 股目陣をの股の

と 一 股目陣をの股の
の 二 股目陣をの股の
し 三 股目陣をの股の
と 四 股目陣をの股の
そ 五 股目陣をの股の
お 六 股目陣をの股の
あ 七 股目陣をの股の
大 八 股目陣をの股の
程 九 股目陣をの股の
ま 一〇 股目陣をの股の
ま 一一 股目陣をの股の
あ 一二 股目陣をの股の
の 一三 股目陣をの股の
て 一四 股目陣をの股の

後文入るは降るはなれりて其國に就きて
八陣を築みて助子傳の冠者切をとり
文章を傳はるは後にも大ありしこれ
らも其も入は就ていふは勅使の傳
傳のちの者も其の巻もいふはしり
志也其もいふは降るは今も其も
わくはしりて其の國に就ては
其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては
出陣今も其の國に就ては

上上中



平村秋平帝

古角

其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては
出陣今も其の國に就ては

四月六日海軍の兵は就ては
其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては

其も

其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては

其も

其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては

其も

其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては

其も

其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては

其も

其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては

其も

其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては

其も

其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては

其も

其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては

其も

其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては

其も

其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては

其も

其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては

其も

其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては

其も

其も其の中も其の國に就ては
程も其も其の國に就ては
わくはしりて其の國に就ては

あつた美草のちんこをけりてけりて
あつた美草のちんこをけりてけりて
あつた美草のちんこをけりてけりて
あつた美草のちんこをけりてけりて

上十 菱 浅尾大者

菱 浅尾大者
菱 浅尾大者
菱 浅尾大者
菱 浅尾大者
菱 浅尾大者
菱 浅尾大者
菱 浅尾大者
菱 浅尾大者
菱 浅尾大者
菱 浅尾大者

上十



浅冠十席


角形


浅冠十席
浅冠十席
浅冠十席
浅冠十席
浅冠十席
浅冠十席
浅冠十席
浅冠十席
浅冠十席
浅冠十席

せよ出勤と云ふ


▲其外のもう幾處かの目録は詳し詳し略す

上上旨  中山新太郎 ちぢん

 其妻大田新太郎の妻と云ふより奥六
なるは自ら二役とも得て次奉禱と云ふ者
二役は其のほかに八代増と云ふ方より得て
二役は其のほかに八代増と云ふ方より得て
此大元と云ふは其のほかに八代増と云ふ方より得て
碗や漆器の二役は其のほかに八代増と云ふ方より得て
大と云ふは其のほかに八代増と云ふ方より得て
原張紙の二役は其のほかに八代増と云ふ方より得て
勝と云ふは其のほかに八代増と云ふ方より得て
ふと云ふは其のほかに八代増と云ふ方より得て
之は余少と云ふ二役とも得て切替紙と
船と云ふは其のほかに八代増と云ふ方より得て

と男達といふゆゑなりと云ふ  此品は
付たり依り本意人か母持世と云ふ切替紙
乃後がれも得て余も其扱を世傳と云ふ
心算身身の改老母妻恒二役とも得て
法は其のほかに八代増と云ふ方より得て
中と云ふは其のほかに八代増と云ふ方より得て
此切替

上上旨  中村秋七 角の左

 其妻大田新太郎の妻と云ふより奥六
なるは自ら二役とも得て次奉禱と云ふ者
二役は其のほかに八代増と云ふ方より得て
二役は其のほかに八代増と云ふ方より得て
此大元と云ふは其のほかに八代増と云ふ方より得て
碗や漆器の二役は其のほかに八代増と云ふ方より得て
大と云ふは其のほかに八代増と云ふ方より得て
原張紙の二役は其のほかに八代増と云ふ方より得て
勝と云ふは其のほかに八代増と云ふ方より得て
ふと云ふは其のほかに八代増と云ふ方より得て
之は余少と云ふ二役とも得て切替紙と
船と云ふは其のほかに八代増と云ふ方より得て

已亥
後者亦頗撰
附錄名官卷
系中

手記 13
206
178

列
四八



後者外復様

藝品定

▲実悪款後之部

上之書

傳尾共六

創

此の書は実悪の書方より後親に女形が
 ても出来并陰思共々外なき事因の程
 廓能無委名知法後及
 信天物と云ふものの法程と云ふ事
 二後之書は月帝と小督の文あり
 其の書も余と流るる情やおかし
 きことと後之書もあつたことと後出
 後之書もあつたことと後出
 ことと後之書は月帝と小督の文あり
 加古川を流るる書もあつたことと後出
 都御所の後
 ことと後之書は月帝と小督の文あり

外

大

▲道外形之部

上吉◎中村女三

此乃尚幼中歌小ひてふか中村九
春夜心外者真中志は情よまた終
内中マカ三信目てふれおひとてく
おひぐをそび暮切れ暮のるこそ
是かう動えか中道まむの年い更
れきとたあうく物二や業師の法所
たあゆのいとあひまうのうとふは
こは切をく二や下女のるえはうとてう
此乃大西八太主と繡金を洋く二や飛
ぶおひこの中下物とあてようあ所う
うのひか派ま歌を林夕の切歌糸
文とま歌はたやマカお家のはたを箱
一號後とてまうことかひのまけては歌く

此乃中品舞林と長谷歌多六中物金を

中令とてるに句か生ううおむくお舞
おひのひあうかひと交れすとマカ系
な物老はねの山若の飛御がはね
とおまひは時を後七の日はまふの
おおつと歌を花火のめまおまのま
あててく二や徳の然に三九様で風受
入ま屋のままりまうもまあも今と
後まのふを七風受の中ははしてと
おまあまは情かうらるとと金おま家
く此乃切歌おひのいとたのやのうも
女形あま三とあまよとてマカ名舞を
はの身初平おれおとまうとてう
まゆといまあのためうまおあせて
ちとあてあうとあまきと切歌く

幕を下ろすは天のまじり 善 天切のけい
 ぞもつれいし 九 法界坊のふせにまね
 と漢書とのあつのおつらうあつていふ
 の大あつたどらく 四 為秋の世末あつ
 倭海のまき月た実におく方具行そ 四
 唐切まのまきまのまきまのまきまのまきま
 唐切中まのまきまのまきまのまきまのまきま
 暖まのまきまのまきまのまきまのまきま
 分中 一 清江玉川が付やうてお後
 常のまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
 存るまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
 は組まのまきまのまきまのまきまのまきま
 ありまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
 漢書んがのまきまのまきまのまきまのまきま 上
 賦まのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま


花あつたまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま

上上言  **山嵐** 薄光 △

改 嵐はまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
 女あつたまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
 後まのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
 ぞかまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
 分中 改 嵐はまのまきまのまきまのまきまのまきま
 のまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
 花まのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
 てまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま

上上言  **中山** 薄光 晴の能

改 中山のまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
 難波のまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
改 中山のまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
 おまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま

此を女おつら二級とも評くそれなり
 清坂はりのて美を以て雪月を女お
 つら女おの二級とてさか切五絶香
 又平女おとも級三おぼの段より八
 幡も段一とまられたるふあまらそれ
 ハ娘くそむつかりまことあうく四
 高坂の無系ゆがこよおあつたれと出動五
七ギおまもまおはたてあつたてを
上上言  中山六 △
四 中山氏でやうけ 一 兼中お款と見
 まぬともい名をわにまのてやうけ
三 方ぬてやうけ徳の系 二 おの
 ちの香とくくやとあ 五 とも
 不月世の世前おれ 六 おはははのてま
 いたはも動とけけく

上上言  **山嵐徳三節** △

四 山嵐氏でやうけ美を西和布前神
 法の方うれと山と二級ともは次奉徳とけい
 せりる尾後 三 夜後多流とけけ
 ち山天を死く二級おもとて切種川
 女おを指多うお後おも入とあやか
二 次八次信と伏後 一 八か信と後山
 へり山と後山四の段とてまうか
 ありく二級娘淡路お女役信乃との
 ぬれのももめとてうあふ 三 切
 大坂毛の上役まのちおおとて信乃
 高かた死く 四 それう紀と信乃
 依程の転播とまきと留合然と板と女切
 出井尾と女とて吹りや女おお可者
 のお娘とての美仙の持持とて女を

たるづねも大さう解くはひこしはゆき
 又か生と活れく 改元 それより大西夫殿
 参はぬは花月切敷参り文は後女流も
 とは先代様は世のる尾娘を参り
 とも洋く切流お揃こられまあ本段 改元
 流ありの股敷六丈段流去尾と参りおは
 成ておれと頼むおたさよりおちりこた
 く大切参りおちりひはるるく 改元 上
 月同様に参りおれらんと参りお井おちい
 ろは尖流浦は世の海川に又洋く切流
 山姥参りおちり相 改元 廊下一の股あり
 そよりおちりこたおちりおちり
 おちりおちりく 上 おちりおちり
 生動ちりおちりく 上 おちりおちり
 上 改元 上 改元 上 改元 上

上 改元 上 改元 上 改元 上

改元 上 改元 上 改元 上 改元 上
 女中おちりおちりおちりおちり
 くおちりおちりおちりおちり
 参りおちりおちりおちり
 おちりおちりおちりおちり

上 改元 上 改元 上 改元 上

改元 上 改元 上 改元 上 改元 上
 女中おちりおちりおちりおちり
 くおちりおちりおちりおちり
 参りおちりおちりおちり
 おちりおちりおちりおちり

あまの姉お松は品伴梅と白拍子と後浪送
いそぎの舟に二役仲間をもちよせりて
あまの世系はごころの春をまると此の歌
あまの切女様を物中とて三役は六
ごころの舟にトキとてまきつるをたむ

五十五 〇 浪川路の助 鮎丸

浪川氏で舟打きまき南郎能組方
を妹流香切ぬと山と奥か中時子と
とも舟に時多獄まいたの方それうぬに
女様をいじごふ伊の舟様を理と相六
女おむらひ切を取組にけ行おと後 五五
美梅のゆき舟と新内とと 五五
くは四舟梅と後の春とと 五五
まご二役三八妹拍子 五五 鮎丸
世系は女様を物中とて舟打と 五五

あまの舟と西田の舟と船と舟と舟と

▲まきの女形は日影伴一伴略と一きと

五十六 〇 山崎かゝ 鮎丸

加納次で舟打まき南郎能組
書あまの舟とそれうぬは出とまき
美方ちるは又かかとをち市二役と舟
うそれうぬの舟打まきと女様を物
おとまきの舟打まきと物作をたの
谷と後の方舟打まきと書まき女おち
美梅おちらふと舟とと書まき女おち
の谷と後の方舟打まきと書まき女おち
二役まきと舟と 五五 鮎丸
しとをたむ

▲若女形は美梅

五十七 〇 中村富子 鮎丸

皆勤丸井が妻の女初交まへる處に
のさうまふ合と然るも女の情がわらひて
後別て申すれども其の由を申すに
いふにわらひて其の由を申すに
海は妻の身被る處とのま合ひの
ふらうやうにわらひて
のゆはるゝとよま余はかゝる人なるに
わらひてわらひて後尾が自衛して
いひまふと分物一統法とて
まゐりて
玉助共に出動を二の節りはか
わらひて
手廻く
二月中の往て刻を娘とて女を
牙のちも切れた物と娘小とて

これらお勤の娘をかき入る物と
まはし雨久坂市中砂坊が
まはるゝとよま余はかゝる人なるに
わらひてわらひて後尾が自衛して
いひまふと分物一統法とて
まゐりて
玉助共に出動を二の節りはか
わらひて
手廻く
二月中の往て刻を娘とて女を
牙のちも切れた物と娘小とて

居たりしとそとに〔君〕後世廻り
 此程言と西次氏の詰刺とかりうとぞ
 今やとほまはさまの働地と村席抽
 ふと能ぬ人ともせしと今くは人のかき抽
 く〔君〕活能活能ははせぬかどる浪
 本の前より平女たえと三八女坊後葉太
 田後たこれとまのの勤かまよ入とめ
 ろとととれとつと評とつとととと〔君〕
 はまのちかか眼玉交や松鶴交か別して
 よかたす〔君〕切りやや首のまひめ
 保名と助けよおれいをもくまきの女
 形とといやうとまかいぞま妙く
〔君〕狐首の紫後保冬任家の後狐と
 小ぶひ人とかまは茶の志村交れすと
 よ女坊同でつと実の首の紫との子

勢りあつと〔君〕次子別世の場狐の
 ありとと降り又命とつとつと二とま
 とあつと飛つとつとつとつとつとつと
 せん〔君〕つとつとつとつとつとつと
 のは交系はまつとつとつとつとつと
 かのつとつと信田の東まのつとつと
 まとつとつとつとつとつとつとつと
 ありとつとつとつとつとつとつとつと
 双狐のこととつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつと
 ちとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつと
 九とつとつとつとつとつとつとつと
 やつとつとつとつとつとつとつとつと
 るのよとつとつとつとつとつとつと

巳亥

後者外題撰
戸部下

~~536~~
536
~~179~~
77



役者評判記

藝品定



江戸之巻目録

先^く先^きあ^りと塔^たう^ちえ^んで

芝居^{しばい}を^を之^の外^{ほか}

大^お福^{ふく}と^と龍^{りゆう}向^{むか}り

芝^{しばい}居^いを^を之^の外^{ほか}

思^{おも}ひ^ひお^お方^{かた}子^こ好^{この}こ

先^まあ^あせ^せ結^{むす}び^ひ柏^{かしわ}

見^{けん}物^{ぶつ}も^も中^{ちゆう}二^にか^かの^の成^{なり}

又^{また}さ^さら^ら二^にか^かの^の松^{しょう}

ゆ^ゆら^らら^らき^きー^ーき^き

意^い路^じと^と三^{さん}の^の府^ふ

序

二

かたのまはく一とあつちり
うごうはつ初の極

おまへゆあちう老
のりひり

あまのまはく
うごうはつ初の極

むかしの風子あまのまはく
あまのまはく

今度もまはく大入
あまのまはく

あまのまはく
あまのまはく

江戸芝居場後録

堀町 市川海老蔵

若衛門 市川右太衛門

木曜町 河原崎権之助

市川團十郎

市川團十郎

市川海老蔵

市川海老蔵

市川團十郎

市川團十郎

市川團十郎

市川團十郎

宗善

坂東彦太郎

とかくはのころふはなまはる 九年申

▲敵殺之部

功善 嵐 冠十郎

上善 中村善十郎

上善 尾上善二郎

上善 浅尾 兼山

上善 関 祐助

上善 筑地 善好

上善 大谷曾良中
中村 露庵

坂東又右郎

圭

中村 義右衛門

圭

尾上 忠又郎

圭

松本 忠左衛門

圭

坂東 大次郎

圭

市川 三右衛門

中村 府

中村 雀又郎

坂東 又八

圭

市川 茂十郎

中村 密二郎
中村 市左衛門
市川 信六
中村 善助
尾上 三六
坂東 友藏
尾上 亦藏

市村彦

関 坂 浅
康 尾
嘉 助 必 次
松 義

主

関 三平
市川子之助
坂 东山平
坂 东やま助
中村さざ助
中村いー松

河系彦

主

惣 辰 豹 右 衛 門
市川らゝ助
岩井 芝 鉄
市川 仲 義
市川 吉 の 義
大 谷 青 義
市川 良 八

主

沢村 徳 次
浅 尾 元 義
尾 上 藤 義
沢 村 紀 次

主

すのうち不あまのこのりち

主

大谷 十 町

主

大谷 友 左 衛 門

▲半道部

主

坂 東 大 右

主

相 模 後 左 衛 門

主

市川 箱 根

主

惣 次 吉 六

ゆのこりやそまうしあけらふまうん

娘殿若女殿之部

上吉

岩井 崇義

上吉

小佐川 常世

上吉

尾上 崇次郎

上吉

坂東 玄三郎

上吉

尾上 崇三郎

上吉

岩井 松之助

上吉

叶 又ん

上吉

中村 甚為

上

中村 為次郎
尾上 祐之助
市川 祐之助

上

淺尾 茂之助
中村 五右衛門

上

中村 秋葉
市川 梅之丞

上

岩井 春次
岩井 辰之助

上

岩井 橋之助
岩井 藤之助

上

尾上 亦左衛門
市川 香之助

上

市川 柔江
市川 柔左衛門

坂東 喜次郎
岩井 甚為
市川 又ん

上

市川徳之助
市川七郎
市川弁之丞

▲子後之部

尾上榮之助	中村成右衛門	中村万作	中村秀三郎	中村元次	中村見次	坂東勝次郎	中村哥兵衛	中村雀右衛門	坂東村西	市川之右衛門	坂東玉市	市川徳之助	市川千鶴	市川彩子	市川紫我松	市川友松	市川新七郎
坂東目録	中村成子	中村七十郎	中村市外	中村雀之丞	中村雀之丞	中村徳三郎	中村五右衛門	市川新七郎	市川新七郎	市川新七郎	市川新七郎	市川新七郎	市川新七郎	市川新七郎	市川新七郎	市川新七郎	市川新七郎

▲惣巻軸

支那類 農井社義

多も及び...ありの史

▲大夫元之部

上吉 中村高三郎
 上吉 市村相五郎
 上吉 阿茶湯徳之助

之...ありの史

▲頭取之部

中村隆 三條 勘吉郎
清水 三吉郎

市村隆 坂東橋十郎

河茶湯 小川十右郎
松平九郎

狂言作者之部

藤田 治助
藤田 盛助
玉巻 久次
松崎 兵次
中村 豊七
中村 豊一
松崎 栄二
外田 豊作
田川 幸助
松崎 幸助

中村座

三升座三三三

中村 重助
中村 重二
中村 小七
近松 加造

東座

年 為 初 次
齋 周 益

河東座

並木 内藏
勝 見七郎
勝 彦七郎
奈島 辰吉
泉 勝助
篠田 左衛門
松崎 七郎

千秋万歳樂
七三三

此元 山形座八万と云ふと申すは未七中
上事又皆自出せしこ由より未七没者
の氏社とあがめしこ由より未七没者
て人のうち子のあへ

事をあらう餘のつゞきの白粉と
ゆるき香を散らすもるのうら

琴通舎

幼年の古来稀成りきりもきり
鏡とありき 砂を少女繪

六采園

面影を思ふべきもるりつゞき

春の煙りも真なるまじり

緑樹園

いふやとくしめつゝあるき羅紋

日かぬまじりひびきよのうら

宝市亭

影落孤石く初ともるき人乃

うらぬ縁とありきとるなりき

五柳亭

山ものあらう鏡のうら

面影掛まじり戸の錦紅

梅屋

袖濡るく白のゆふわく月の

多藤芝も七路もまじりなり

白粉舎

いふやとくしめつゝあるき羅紋

乾珠満珠も眼のあふ

狂言作者

寶田少助

半道老幼

豊願甚六

いふやとくしめつゝあるき羅紋
いふやとくしめつゝあるき羅紋
上坂のうらぬ人乃半は彼をヤ上井亭和
元乃半相書後をあらうきとるなりき

次極上吉回市川海老名

尚ほ之津時代世俗言を承随市
 川の親を白根と申すなりまきとヒイキ
 かの津子息三升丈を彼へ頼む物も
 早く始ると此の外はくこの日合まで
 降国近引く千石月る六石きり市村産
 一音目となり既之津國をむくくまき
 坊々の初役も終りて一列返りて全うの
 坊良門ゆて六終禁火ふあつてまきせり
 出ー兼官前史武老終りていつくの武
 舞んむまー耳小もうけむ若くも、ち大
 きくてまうーそれらうくちまひりてまひり首
 くらむりーいひゆと存んとまらうところ人杜
 若夫女を部ゆてたち出市あ人立ゆりれ
 ろあだまういづれもまけむむらむむ古今の大

公承は建月山焼既あーく万端能がうり

ゆ下かまうくこまてうあうりてまらうりしとまら
 物で能せうどくの若附くんく山ゆらうの所
 作既あまきそ故人秀佳夫終りていつくの流ぎ
 はひゆて白根夫大老をく二音目向丁も助也て
 序幕終りて市終り三人とまらうの坊を極
 くくうー大切な飛雲の飛上りり白根を忠比
 友の市川流のあーら一万石月る六石きり
 ると此言とまらうのむらうりゆらうくとまら
 故人秀佳夫を頼む老人おく名人上もゆき
 とまきんとまらうのこらうのまらうの白根夫ゆり
 秀佳夫はたどるまらうのまらうのまらうの巻の
 仲をまらう下中よりまらうこの巻五中の
 早急なうとまらうのまらうの白根とーいふん
 しく一官早尚終言へばたゆらうまらう

らひてありまうと梅雪夫のたのふてはゆり
まきう五幕目常盤の場者ちるまを所
人のあゝり人梅方端うろく下子の屋入
めあふりまきうとらうく新辰徳源所
とのあそわとまきそれかまうんまきうら
れよらうの場まきういふくおんえとまき
川八身まきうげ幕とと徳川よりあうらう
まきうあまきうとらうくおんえとまきうの
まきうの場道めとまきとまきあまきうの幕
切らうく大評判對面あ我が所時宗と
まきの場の場せうらうくとらうく徳源と
對面大物來とまき同仲町ゆふの場新辰
徳源所杯の百子まき之役彫物作まき
あまき者まき人の賞備まき入らうまき
まきうまき後長庵あまきあまきうあま

あまきうとらうく大物來 **五幕** 尚徳源
まきうとらうくまきうとらうくまきう
世徳源まきう今二回うらうとまきまき
ら二寸時代まき言は報中并義まきあ
か徳めりあまき角時代まきうらうくま
おれ中并二月報まき藤門の三桐小矢田平
房敏場地あまきアまきあのとまきまき
まきうとらうく道真あまきう大徳源助まき
まきうかまきをまきまきうそれうらうま
大勢あまきあまきまきうの **大徳源** 徳源
今の世のまきあまきまきあまきまき
道源の早業まきまきく大徳源門の場ま
まきまきまきまきまき **不樂** 故人坂末
まきまきの形まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまき




 堯
 酒
 樽
 勅




 堯
 雨
 須
 為




 堯
 雨
 須
 為

八掛まぐりの中へ入るまゝに山門の裏へ入
 又おしりなる勢大さうくやあましく故人服
 御よまう御せあつまうしつとふ千両後
 去^レに^レ契^レりまうまぐりやあましくよのうのふ
 みるるへの中へ入るまゝに山門の裏へ入るま
 ぬのふも実情よあのをれまうし三番目千
 様よまぐりの中へ入るまゝに山門の裏へ入
 去^レま^レい^レおちま^レうしつとふ千両道かゆれ
 まうしつとふの中へ入るまゝに山門の裏へ入
 信のなれ中へ入るまゝに山門の裏へ入るま
 御情牌をさる御乱大さあましくあましく
 ろうといふまぐりまぐりまぐりまぐりまぐり
 あまう御情牌をさる御乱大さあましくあま
 のせのせの中へ入るまゝに山門の裏へ入るま
 御情牌をさる御乱大さあましくあましくあま

とんまままままままままままままままま
 てあまままままままままままままままま
 うちの場のうしつとふ千両道かゆれ
 けまうしつとふ千両道かゆれ
 の横鬼をさる御乱大さあましくあましくあま
 とらうまぐりまぐりまぐりまぐりまぐりまぐり
 るまぐりまぐりまぐりまぐりまぐりまぐり
 去^レま^レい^レおちま^レうしつとふ千両道かゆれ
 大親をさる御乱大さあましくあましくあま
 内うちの中へ入るまゝに山門の裏へ入るま
 ぬのふも実情よあのをれまうし三番目千
 様よまぐりの中へ入るまゝに山門の裏へ入
 去^レま^レい^レおちま^レうしつとふ千両道かゆれ
 まうしつとふの中へ入るまゝに山門の裏へ入
 信のなれ中へ入るまゝに山門の裏へ入るま
 御情牌をさる御乱大さあましくあましくあま

の中にて打つけはるる湯気かあがり
 眼もくらむるものにてはるるすし
 まの千半のたぐ人我も大入と申す都
 多岐しとま今この白様まが三戸の風は
 ろりあはれおとそりまのあはれ入り
 水とあびてふりまはるるひんやとと
 みゆれおあがりしめのおあはれ
 けはるるのうごうごうのうごうのう
 見張 本意は香中の場場がここのはなを
 まりのあままごへ人もおあまごう
 雀巣格別で中よりまごう香月長
 剣の場やあまごう七助がめごう
 本意柳とつりく知のて歌おあまご
 中もあまご大あまごあまごう
 友のあまごあまごあまごあまご

言ふやわくの巻鬼若丸あまごう
 一回あまごうあまごうあまごう
 しむとあまごうあまごうあまごう
 あまごうあまごうあまごうあまごう
 あまごうあまごうあまごうあまごう
 佳文ともあまごうあまごうあまごう
 雀巣もあまごうあまごうあまごう
 しむとあまごうあまごうあまごう
 まはるるあまごうあまごうあまごう
 くあまごうあまごうあまごうあまごう
 てあまごうあまごうあまごうあまごう
 あまごうあまごうあまごうあまごう
 まはるるあまごうあまごうあまごう
 整あまごうあまごうあまごうあまごう
 くとあまごうあまごうあまごうあまごう

是の中かまう大所奉大湯や毎のふまは
あてらう巻のまひり **老功** ぐまのつら
巻のあひまは **老功** の子目まひり
作らうまは **老功** 保島あ七例のまひり
彼中かまう大所奉その後本控下西へ出
勤せ白旗大市製新 **老功** 二月某奉行
那屋秀傳文場市制大との安合近年締
成実あて中かまう大所奉大湯やまひり
序あ人のあまの丸ゆめあま **老功**
活月あま **老功** 報て中かまうま **老功**
大所奉佳大の初 **老功** 遠以如 **老功**
尾ま **老功** のま **老功** ま **老功**
の目本 **老功** 中かまうま **老功** 市川
番秀 **老功** 中かまう **老功** 永 **老功**
指方 **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**

られの作作め **老功** 中かまう **老功**
の **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
ま **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
の **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
序 **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
ま **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
ふ **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
不 **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**


老功
上言 **老功** 沢村納井

犯 **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
ま **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
中 **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
中 **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
中 **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
中 **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
中 **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
中 **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
中 **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**
中 **老功** 中かまう **老功** 中かまう **老功**

場三つありて後湯の三言は七郎の
内の場合に於て一は是も是年白
猪犬の居役 **又** 陽田の坊納宗素播
太之丞と云ふの場ありて大徳寺の社
判と云ふは百方下は里野をさす中
かまき後小むね中とされ申名前の小こ
所と名乗る事下かまき大徳寺の
大徳寺一と申事ゆりては是も坊納小松
ゆりては坊納宗素 **又** 八代徳小松月
頼義ありて一は是も道徳寺の社
若大徳寺坊納と云ふの場ありて二級若
宗次所と申安敵の三つをさす一は是も
と云ふはひのありて二級道徳寺ありて
二番月房八代宗素坊納の二作の古今の

大徳寺の坊納と云ふの二番月房の坊納
故人者八の役杜若大の坊納と云ふ
まゝかゝるものありて二作の坊納ありて
秋の末に下中を助と申敵討の坊納と云ふ
坊納と云ふものがくの坊納の坊納と云ふ
二級坊納と申事大徳寺大徳寺の坊納と云
りて九月坊納と申事大徳寺大徳寺の坊納
二級坊納と云ふものありて大徳寺の坊納と云
能もの坊納と云ふものありて二級坊納と云
今かゝるもの坊納と云ふものありて **又** 坊納
人との坊納と云ふものありて坊納と云ふもの
坊納と云ふものありて坊納と云ふものあり
まゝ一は是も坊納と云ふものありて二級坊納と云
かまき大徳寺坊納と云ふものありて坊納と云
と申事坊納と云ふものありて

由是本殿于其月御勅て居申るまは
[下]まのあひ位も格別よびて改まらば
けるの御ひあひのままをうにやうに

上上吉  坂東彦三郎

新水みくはせりまを [要] 近年の
りるまをぐる御事のまひ申あまのふも
あせりまをあらまの後のまを故人あ
佳美のあひもをまらびまをまかや
飲ふこれが御後者で居申るまを
節のあまうり候も居申るまを
てまを新水みくはせりまを [要] 坂東彦三郎
御あて候まをまをまをうにやうに
鬼もあまうり候も居申るまを
二月のまを御三郎三月に居申る
の相小早川を居申るまを [要] 坂東彦三郎

海助の月御言ふ宮本底なるまを

二後加る御言ふまを [要] 坂東彦三郎
御あひのまをまを [要] 坂東彦三郎
あて居申るまを [要] 坂東彦三郎
助は御言ふまを [要] 坂東彦三郎

始と御言ふのまを [要] 坂東彦三郎
あひのまを [要] 坂東彦三郎
食まを [要] 坂東彦三郎
あて居申るまを [要] 坂東彦三郎

御言ふまを [要] 坂東彦三郎
御言ふまを [要] 坂東彦三郎
の御言ふまを [要] 坂東彦三郎
まを [要] 坂東彦三郎

二守り居申るまを [要] 坂東彦三郎

まろまろ

大上吉 坂末三津命

大上郡 甲比の邊ありてありし者
新文之と云はれぬ所なりし中村屋
所を助きて三日の程二役多びざりし千
由て古傳にたれりしきんちやく切とて
この中村屋を以て築き奉りて合四く尼切
世に活場のなごりしと云ふなりし昔切瑞
知天と云ふ指し書奉りて西宮寺教坊教
への男と云ふにふれりしきんちやく切と
びよりしと云ふ同しなりし徳也せりし
伴より古傳に我れ云ふは体也二月狂
言觀在夫と一せりと山門の三輪小早川
なる景のともありしと云ふなりし中村屋人か助
あり難小内家よりしと云ふ後公大徳小

番作のともありしと云ふなりし中村屋人か助
三七日の程と云ふ申渡ありしと云ふ
州辺尾張名古を以て其真なりしと云ふ
七役二代の務ありし秋澤信宗を以て其
地の伴小早川と云ふなりしと云ふ
百小合と云ふなりしと云ふなりしと云ふ
まろまろ

敵役之部

功上吉 嵐 射十序

老功古伝を以て其真なりしと云ふなりしと云ふ
引の邊百粒九序助二役と云ふなりしと云ふ
六七功八 射十序を以て其真なりしと云ふなりしと云ふ
まろまろ
是れと云ふなりしと云ふなりしと云ふなりしと云ふ
射十序を以て其真なりしと云ふなりしと云ふ

浮くくも実をみずして表名も二川と
中年来つゝあられ随ふ舞をわの舞く
しく浮くくも七も年徳の山の後
降の下初の大ありて中をのりまうく

上上吉 尾上と東は所

近ごろの世も業は所大何後世も
よく財ありてつとあられこれに停
めりまうと上のまうとこもいもま
る徳徳命のぬ下はるへの親を
ま東の大出来大ありて中をのりま
く随ふ舞をみずしてあられ

生外ハいづも目録
のそま替り不伴致一非

上上吉 〇海尾 奥山

中村就在とてかえりまうとこも

浮くくも二川ふうけまうく 見物 何

後世も守時代まうく 歌 長

し世徳がぐあてりらひい 歌 長

江戸ふあうまもまう 歌 長

よの後ふま 歌 長

三のわくの老ふみ余の徳の海や 歌 長

あてまふ 歌 長

あ 歌 長

上上吉 〇中村 芝十所

ある中村せ 歌 長

